

令和元年6月24日現在

機関番号：32406

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07061

研究課題名(和文) 芸術と倫理-政治の分節化をめぐる20世紀フランス思想の再考 サルトル研究を起点に

研究課題名(英文) Rethinking 20th century French thought on the relation between aesthetics, ethics, and politics: starting from the Sartrean study

研究代表者

根木 昭英 (NEGI, Akihide)

獨協大学・外国語学部・専任講師

研究者番号：00802034

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、サルトルにおける「美学」、「倫理」、「政治」の潜在的接続をひとつの思想体系として再構築し、さらにこの思想体系の成立過程を発生的に跡付けることで、その思想史的意義を解明することであった。期間中の研究を通じ、当初の計画どおり1) 神学的伝統、2) 現象学の系譜、3) 同時代の文学言語論という三つの観点から、サルトルにおけるこの思想体系の成立を整理することができた。当該成果は単著としてフランス語にて出版されることが決定している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義はなによりも、一般にサルトルに帰されている政治的「アンガージュマン」の思想とは明確な対照をなす「美学」、「倫理」、「政治」の潜在的接続を、「証言」をめぐる彼の思想体系として再構築したことにある。これによりサルトルの思想史的位置づけ、さらには20世紀フランス思想史の見取り図全般に再考を迫ることができた。来年に予定されている当該研究の仏語出版を通じ、フランスのサルトル専門研究に新たな論点を問うことができるはずである。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to reconstruct the latent but systematical Sartrean reflection connecting "aesthetics," "ethics," and "politics" and clarify its significance in the history of philosophy. The research allowed us to elucidate the genesis of the Sartrean system from three perspectives: 1) theological tradition, 2) phenomenological filiation, and 3) contemporary literary language theory. The results of this study will be published as a book in French.

研究分野：フランス思想

キーワード：サルトル 芸術と倫理(モラル) 芸術と政治 実存主義と神学 文学的コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

本研究計画の出発点は、報告者がジャン＝ポール・サルトルの思想を主題として、2016年にパリ第四大学に提出、博士号を取得した学位論文である。当該論文は、サルトルの全著作、なかでも1940-70年代に執筆された伝記的批評群から、「芸術」、「倫理」、「政治」を接続する一貫した潜在的思索を再構成する試みであった。そこで再構築されたサルトルの思索体系は、審美的な実存様態およびそこから生み出される芸術作品に、普遍的歴史運動と特異的実存の「証言」（非伝達の伝達）としての倫理-政治的位相を結びつける思想であり、「政治的アンガージュマン」に要約されるサルトル思想の一般的理解とは、多くの点において明確な対照をなすものであった。

研究を進める過程で、報告者は、以上の考察を「美学」、「倫理」、「政治」の関係をめぐりより広範な思想史の再検討へと拡張することが可能だと考えるようになった。すなわち、サルトルのアンガージュマン思想そのものうちに、その後サルトル批判として登場してくる思索をも包括する視座（とりわけ「証言」としての文学、芸術という視点）を見いだすことが可能であり、そこから、二項対立的図式（「政治的アンガージュマンか芸術至上主義か」）に依拠してサルトルから後続思想への展開を説明する一般的な思想史理解とは異なる形で20世紀フランス思想史の流れを描き出すことができるとの見通しが得られていた。

2. 研究の目的

本研究の目的はしたがって、なによりも、それまでの研究（博士でのサルトル研究）で再構成されたサルトルの美学-倫理-政治体系が、20世紀フランス思想というより広範かつ一般的な文脈において持つ思想的意義を明らかにすることであった。そして、そのためには、1) この思想体系が、他思想家からのいかなる影響のもとで形成されていったかをめぐり系譜的分析を通じ、サルトルの思想史的位置づけをその生成において画定すること、2) この思想体系が、論点を共有する他思想家の思索と比較してどのような一般的意義を有しているかを、それぞれの観点に関する比較研究を通じて画定すること、の二点が必要だと考えられた。そこで報告者は、サルトル以外のコーパスからサルトルの思想を照射する上記二つの作業を合わせて行い、一つの研究成果としてまとめることを研究期間中の目的として設定した。

3. 研究の方法

本研究は、それまでの研究（博士でのサルトル研究）で得られた成果を出発点としつつ、他コーパスを用いた研究を組み合わせこれを拡大・深化させるものである。そのため、それまで成果として再構成されたサルトルの思想体系の諸論点を起点としつつ、その思想史的な成立過程と、他作家との関係から見た意義に関する諸仮説をそれぞれ構築し、これを文献的に確認してゆく手法を採用することとした。起点となった具体的諸論点はつぎのとおりである（それぞれが、博士論文全三部の各部の考察に対応している）。

- a) 作品創造の前提となる芸術家の存在様態をめぐり理論
- b) 作品創造をめぐり理論
- c) a,bで構造解明された芸術的営為が持ちうる倫理-政治的射程に関する思索

これらそれぞれについて、上記1)系譜的観点、2)比較的観点から仮説検証を行ったうえで、最終的に、あらためて各成果を、以前の研究成果として得られている美学-倫理-政治体系の論理秩序に合わせて一つの研究成果へと統合した。

4. 研究成果

研究成果として、以下の諸点が得られた。

【A. サルトル未公刊資料の収集と分析】

サルトルの高等師範学校時代（1924-1928）の未発表図書貸出記録をパリ高等師範学校図書館にて写真複写し、判読してゆく作業に取り組んだ。これにより、とりわけ初期思想形成期においてサルトルが参照した可能性の高い資料を整理することができた（ただし当該資料はその後2019年2月に公刊された）。デカルト、スピノザ、カントなど、とくに著名な哲学者の著作を複数回借り出しているほか、彼らの哲学を主題とした当時の二次文献も多く借り出していることが確認できた。

【B. 審美的な実存様態をめぐる思索に関する思想史的研究】

上記 A の図書貸出記録に依拠しつつ、サルトルが参照した可能性の高い当時の二次資料 (Basch, Barni 等) の読解を進めた。芸術創造の前提となる審美的な実存様態についての思索形成にあたり、サルトルが、美と目的性をめぐるカントの議論 (『判断力批判』) をどの程度参照し、これに依拠しているかについて整理することができた。

【C. 「神」概念をめぐる系譜的研究】

サルトルにおける二つの「神」概念 (「自己原因」、「即かつ対自」) のうち、「自己原因」概念について、上記 A の図書貸出記録に記載のある文献 (なかでもデカルトとスピノザに関連する当時の二次文献 (Leveque, Delbos 等)) との対照を行った。その結果、サルトルにおける「自己原因=神」概念の形成が「即かつ対自=神」概念の形成に先立っている点、またそこから、彼の神概念の持つ人間主義的特徴 (「神」概念はあくまで「意識」たる人間の概念からの派生概念として説明される) が導かれることを明らかにできた (雑誌論文成果①として公表)。

【D. 文学言語の位相をめぐる思索の系譜的研究】

サルトルの参照が確認できるフッサールの五著作、とりわけ、報告者のこれまでの研究において蓄積の手薄な『内的時間意識』、『形式論理学と超越論的論理学』、『デカルト的省察』について読解作業を進めた。その成果として、サルトルにおける文学言語の両義的位置づけ (記号/イマージュ、意味作用/物質性) が、その淵源をフッサール現象学における志向の区別の両義性そのものにまで遡ることを明らかにできた。

【E. サルトルの文学言語論成立における文学史的背景の考察】

サルトルの参照を確認できるヴァレリー、ポーラン、ブランシヨの各論考とサルトルのテキストを対照することで、とりわけ 1940 年代から 50 年代にかけ、「他者契機を介したナルシスム」として規定可能な彼の文学的コミュニケーション論が成立してゆく文学史的背景を、とくに「コミュニケーション」と「ナルシスム」の両義性を軸として跡付けることができた。

【F. サルトルにおける美学と倫理および政治との接続に関する思想史的研究】

1950 年代以降のサルトル思想において、芸術的営為と倫理および政治の接続は、「人間的条件の不可能性」と、作家によるその「了解」をその哲学的基盤としている。「人間の不可能性」についてはバタイユ (『無神学大全』三部作) とサルトルのテキストを照合することで、また「了解」概念については、サルトルの精神分析学への言及を整理することで、サルトルの思索の思想史的成立過程をまとめることができた。

以上の研究を進めるのと並行して、研究期間全体の成果を単一の仏語論文として整理する作業にも取り組み、これを完了することができた。当該成果は、ブルゴーニュ大学 Guillaume Bridet 教授による査読を経たうえで、ディジョン大学出版「エクリチュール」叢書より、単著として出版されることがすでに決定しており、現在編集作業が進行中である (図書成果①)。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

- ①根木昭英、「二つの「自己原因」— サルトルにおける神の問題」、『フランス哲学・思想研究』、日仏哲学会、2019 年 (近刊)、頁数未定、査読有
- ②根木昭英、「文体と規範、二律背反か — ジル・フィリップ氏講演会報告」、『フランス文化研究』、獨協大学外国語学部フランス語学科、2019 年、69-73 頁、査読無

[学会発表] (計 1 件)

- ①根木昭英、「文学と著名性、一致なき一致 — サルトルにおける「読まれること」の諸相」、公開シンポジウム「セレブリティの呪縛：18~20 世紀フランスにおける著名作家たちの肖像」、立教大学、2018 年、招待有

[図書] (計 1 件)

- ①Akihide NEGI, *La "Poesie de l' Echec" : la litterature et la morale chez Jean-Paul*

Sartre, Editions Universitaires de Dijon, 2019 (予定), 頁数未定 (300 頁程度)、査読有

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号 (8 桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。